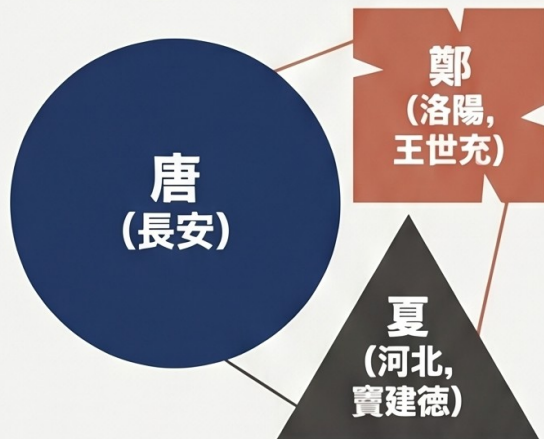


武徳二年： 唐帝国誕生の臨界点

619年（武徳二年）が、唐が地方勢力から「唯一の帝国」へと飛躍した決定的な転換点であることを理解させる。

天下を分かつ 「鼎立の構図」



長安の唐、洛陽の王世充（鄭）、河北の竇建徳（夏）の三勢力へ趨勢が集約される。

指導者の「徳」 が招く明暗



欺瞞に満ちた王世充（鄭）に対し、

隋への忠義と質素を貫く「徳」が際立つ

亡国の危機と 李世民的覚醒



秦王・李世民

北方の劉武周により根拠地・太原が陥落するも、秦王・李世民が奪還を誓い出陣する。

加速する 「天命」への帰順



李世勣や羅士信など、各地の有力者が次々と唐の軍門に降り、統一へのパズルが埋まる。